

いたずらに 過す月日は多けれど

道を求むる 時ぞ少なき

—道元禅師—

やりがいある仕事から離れたとき、愛する人を失ったとき、病気におかされたとき、或いは逆に平凡な日常の中に於いてでも、いたい何のために生きているのか、ふと感じる瞬網があります。そこで自分に問いかける。「私は今、何をなすべきか・・・」

「何をなすべきか」、それは「いきがい」への原動力なのです。

自分に問いかけて積極的に何かをしていくこと、それが「いきがい」へと結び付いていくのです。

畑を耕すことでも、写鼻を撮ることでも、絵を描くことでも何でも構わない、今やっていることをただ「ひたすら」一所懸命にうちこむこと、そこに生きる喜びの原点があります。

いまの私たちは情報の洪水に呑み込まれ、多様な価値観、様々な思いに振り回されながら、時間だけがいたずらに過ぎていきます。

「驚くことはない、素直にただけがいいのだ。生きるときは、ただ精一杯に生きぬけばよい、あるがままに。」 祖師方はそう教えています。それが禅のころであり、仏の道でもあります。

空しい日々のくり返しのように思えても、仏の教えにかない、まっしぐらに生きること、ほんとうの生き方をすすんで求め励むことが大切なのです。

解説

道元禪師は、折りにふれ、たくさんのお歌を詠まれております。

それらは、「傘松道詠（さんしょうどうえい）」という名で親しまれてきました。その歌には、人間の心情や、自然がたくみに表現されていて、文学作品としても古くから高い評価を受けてきました。

また一方では、仏の教えを端的に表し、真髓をズバリと指摘する力強さ、厳しさを句外に偲ばせております。

冒頭の句から、無常の日々のなかで私利私欲にとらわれた無駄な日送りをする私たちを、やさしい語りかけながら、叱咤し、覚醒させる迫力を感じとることができます。

いたづらに

過す月日は

多しけれど

道と心とむる

時ぞすまなき

道え禪師

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部